

シャクヤク

牧 幸 男

牡丹の花が終わる5月中頃、春先に赤い芽を出していた芍薬も、真っすぐに伸びた茎の頂上に見事な花が咲きだす。芍薬は「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」といわれるように、花の美しさを女性の姿で表している。私の学生時代、この言葉をもじって「立てばパチンコ、座れば麻雀、歩く姿はダンス形」と遊びにふける学生を表現していた。当時の学生の生活を表した言葉だが、パチンコは今日では椅子に座り、麻雀もあまり盛んでなくなり、ダンスも以前ほどでなくなっているので、完全に忘れられた言葉となっている。また、現代の女性からは、女性の姿を花で表すなら、日本古来の花でなく、もっと違った花で表現ができないのかと叱られそうである。古い時代の遊びの姿は大きく変わっている。



芍薬の畑

芍薬と牡丹は、牡丹を「百花王」と呼び、シャクヤクを「宰相（相花）」の言葉が与えられ、花の姿や植物学的にも、常に対照にされてきた植物である。

芍薬はアジア大陸東北部原産のポタン科の植物で、通常鑑賞用に庭植える他、根を薬用に利用している。根はやや数多く、細長い紡錘状で肥厚する。茎は一株から数本直立して出て、高さ60cm位になり、葉と同様に無毛である。初夏に枝先に大型の美しい花が開く。花の色は白、紅色が主であるが園芸種になると、絞りや一重、八重、さらに重ねの厚い千重、万重といわれる種類も生まれている。芍薬は多年草で、地上部は毎年枯れる。一方、木である牡丹の多くは、芍薬の芽に接ぎ木されたものである。「草に木」を接いだものだが不思議に良く調和する。

幸田露伴は『欄言』（1901）で「……牡丹の花は重げに、芍薬の花は軽げなり。牡丹の花は曇りあるやうにて、芍薬の花は明らかなるやうなり。牡丹は徳あり、芍薬は才あり。」と書いているように、日本人に最も好まれてきた植物であろう。芍薬の品種が多いことは触れたが「長野県薬剤師会薬草の森りんどう」（長野県菅平薬草栽培試験地）では現在(2021)次の芍薬が植わっている。先ず自然園には野生でのヤマシャクヤクが、耕作地では梵天、名月、信濃月、ルーズベルト、ラズベリーサンダー、春の虹、サツキ、真田錦、ブルーサファイア、マーシャルパーラメント、マーサリードを見ることができる。

芍薬類の自生は北半球には30数種分布するが、北アメリカには2種しか自生していない。わが国で見ることができる種は、主に樹下に自生する白色の小型の花が多いヤマシャクヤクと、根がやや紅紫色を帯びるペニバナシャクヤクである。わが国には中国から朝鮮を經由して伝えられたが、渡来時代ははっきりしていない。

中国では最古の詩集の『詩経』(BC6~BC7)の秦有しんいに芍薬の記録がある。この記録から推測すると、紀元前5世紀頃に既に栽培され、薬

用にも利用されていたようである。時代が進み晋の時代(265~426)になると仏前に供した記録があることから、園芸植物の栽培もおこなわれていたようである。中国における栽培の歴史は、牡丹より古い。観賞は隋時代(581~618)から始まったと言われ、宋代(960~1279)になると三万種に及ぶ種類が生まれていたらしく「洛陽の牡丹、揚州の芍薬」は天下の名所と言われるほどになった。

わが国では『延喜式』(905~927)に薬用としての記録がある。貝原益軒著『大和本草』(1709)には、寿永年間(1183頃)奥州河沼郡千笑原に千本の芍薬を植え、満開の美観を述べているように、花の美しさに古くから多くの人に愛でられていたことが分かる。その他、最古の生花書『山伝抄』(1445)に芍薬使用が記載され、最古の園芸書の『花譜綱目』(1681)には23種の芍薬が記載されている。特に、江戸時代には茶花として鑑賞されるようになり品種改良が進み多くの園芸品種が生まれている。

明治時代以降、芍薬を日本で改良した品種を和芍と呼び、ドイツの医師で博物学者のケンペルEngelberut Kämpfer(1651~1716)が1712年に和芍をヨーロッパで紹介後、この地で品種改良したものを洋芍と区別している。最近、市場では従来の「和芍薬」より花の日持ちも良く、色も黄色や赤紫色、花弁も細かく裂けている華やかな「洋芍」が主流となっている。

この花の美しさは、昔から多くの歌人に詠われてきた。

芍薬の 赤き芽立ちよ いつのほど かくは伸びしと おもほゆるなり 土田 耕平

芍薬の 蕾をゆする 雨と風 前田 普羅

植物名は、漢名の芍薬の音読みで、^{えびすくさ}一名を夷草と言うのは、異国からきた薬草の意である。李時珍(1518~1593)は『本草綱目』(1596)の中で「芍薬、猶お^{しゃくやく}焯約のごとし。焯約は、美好の貌。此の草、花容焯約、故に以て之を名づく」と、花の美しさから名付けられたようだ述べている。別名には、^{ぬみぐすり}将離、^{かよおぐさ}可離、白犬、花相、飲薬、貌佳草、ピオニー、夷薬、顔美草等が知られている。学名はPaeonia albifloraで、属名はギリシャ神話の中に登場する医師Paeonの名前、albifloraは白い花の意で、昔から各地で薬用に使われていた白い花の植物ということになる。

薬用は根を使うが、学名にギリシャの名医ペオンの名がつけられているように古くから使われていたことが分かる。医師ペオンは、トロイ戦争で負傷した神々の治療にオリンポスの山から採取した芍薬の根を使って治療したことで知られている。この時、冥界を司る神パーデーアの傷を治したことから、医術の神エスクラピスはこれをねたんでペオン殺してしまった。パーデーアはこの死を悼み植物名をペオンに変えた。英語で芍薬をPeonyと呼ぶのはその名残である。中国では『神農本草経』(250~280頃編纂)の中品に収載され、「主邪気腹痛、徐血脾、寒熱疝気瘕、止痛、利小便、益気」とあり、腹痛、婦人病、冷え性等に古くから使われていた生薬として知られている。『日本薬局方』JP17にはシャクヤク、シャクヤク末、芍薬甘草湯が収載されており、生薬の市場取引も多い。効能は鎮痛鎮痙、婦人薬、冷え症、風邪等に用いられている。

花言葉は一般には「恥じらい」「はにかみ」「謙遜」で、花がピンクは「はにかみ」、白は「幸せな結婚」、赤は「誠実」である。

